モンゴルにおける歯科栄養教育とこれから

管理栄養士　土居陽菜先生

1.はじめに

モンゴル国では，著しい経済成長と伝統的食文化から西欧食への変化のさなかにあり，そのことが小児の健康状態にも影響を及ぼしている。なかでも深刻なのが小児の虫歯であり,2013 年から 2 年間で 89.8%から 96.8%に罹患率が増加している。また，モンゴル国において栄養や食に関わる専門的な資格である，管理栄養士、栄養士，調理師は養成されておらず，調理職員がこれらに相当する専門職となっている。したがって、小学校において栄養・食に関する授業は通常は行われておらず、歯と栄養・食を関連づけた知識は乏しいと考えられる。このような現状の中，歯科栄養教育を行うことにより，児童が虫歯と栄養の関係性を理解したり、より良い食べ方を学ぶことができれば，小児期の虫歯罹患者率低下や、ひいては健康な体づくりにつながる可能性がある。

モンゴル国の小学校において、児童が積極的に授業に参加し、知識の習得に取り組める歯科栄養教育やブログラムを実施し、評価を行うことを目的に本研究を行なった。

2. 対象・方法

対象は，モンゴル国ウランバートル市にある私立小中校一貫校に在籍する Grade3（第 3 学年）の 3 クラス 72 名，Grade5(第 5 学年）の 2 クラス 58 名であった。2019 年 4 月 10～17 日、9 月 15～21 日に現地を訪問し，9 月 18 日に食の授業を行った。8 月に現地関係（モンゴル国立医科大学歯学部岡崎特任教授）と指導案と教材案の協議による検討を行い，その後教材作成，スタッフ研修を行った。また，食の授業の評価は、授業終了時に児童が記入したワークシート（理解度をはかる問題、質問紙，自由記述による感想）の内容および授業観察者からの自由記述欄を含む質問紙より行った。

3. 結果

モンゴル国の児童に適しているかを確認しながら，指導案を作成した。各学年ともに設定した学習目標に基づき、モンゴルでなじみのある恐竜や児童の興味を促すクイズを用いながら授業を進め、授業終了後には自作の資料を配布することで授業内容の定着を目指した。

実施後に各学年の質問紙を集計した結果，Grade3 の児童は質問紙の回答方法が適切でなく，理解度を評価することができなかったものの、「噛む」ことや「唾液」「おやつ」についての自由記述を多く得られた。また，Grades の児童は理解度をはかる問題では 9 割以上の正答率、話の内容に関してもすべての項目で肯定的な評価が得られた。

授業の観察者からも，いくつかの課題は出たものの，肯定的な評価が多く得られた。

4. まとめ

評価を行った結果，実施した歯科栄養数育は、児童が積極的に授業に参加でき、知識の習得に取り組めるものであったと考えられる。

5. 参考文献

1. 岡崎好秀．モンゴル国における食生活と歯科疾患．国際歯科学士会日本部学会誌 47:1,2016
2. 北村義久．目の前の子供たちを診て感じた口腔諸症状についての仮説．日本学校歯科医会会誌 125：38，2015
3. 独立行政法人国際協力機構（JICA）特定非営利活動法人 アジア科学教育経済発展機構 株式会社コーエイ総合研究所、モンゴル国における高等専門学校型教育にかかる情報収集・確認調査、ファイナル・レポート.P.29，2017

略歴

2020 年 3 月　兵庫県立大学環境人間学部環境人間学科
　　食環境栄養課程　永井研究室卒業
2020 年 4 月　姫路赤十字病院　入社（2023 年 3 月退職）
2023 年 9 月
JICA 青年海外協力隊（ボランティア）にてモンゴル渡航予定

モンゴル国幼児のう蝕予防を目的とした食育の教材開発および利用可能性の検討

湯面百希奈[*1,*2]，土居　陽菜[*3]，髙山　祐美[*1]，能瀬　陽子[*4]，永井　成美[*1,*3]

[*1]兵庫県立大学大学院環境人間学研究科　[*2]京都栄養医療専門学校　[*3]兵庫県立大学環境人間学部
[*4]大阪国際大学短期大学部栄養学科

【目的】モンゴル国では，幼児のう蝕罹患率が 9 割以上と高い。そこで，同国幼児のう蝕予防用食育教材を開発し，現地幼稚園での実践と関係者による評価から，教材の利用可能性を検討することを目的とした。
【方法】現地におけるアセスメントの結果より，優先課題を「う蝕予防のためのおやつの選び方と食べ方の知識が十分でないこと」に決定し，学習目標を「おやつの選び方・食べ方の知識習得」として，幼児向け演劇教材と保護者・教師向けハンドブック（モンゴル語）を開発した。公立 A 幼稚園 5 歳児クラス（52名）で単回の食育を行い，同日に園児の保護者と教師（13名）にハンドブックを配布した。教材の利用可能性（ニーズや幼児の理解度に合っているか，等）を検討するために，演劇教材では食育参観者 7 名（幼稚園教師，歯科医師等）に，ハンドブックでは幼稚園教師13名に質問紙調査を行った。また，録画映像の観察から食育実施時の園児の反応と参加度（学習への積極的態度）を評価した。
【結果】演劇教材に対し，参観者の 8 割以上が教材名，内容共にニーズや幼児の理解度に合っていると評価し，今後も活用したいと回答した。ハンドブックに対しては，「保護者の役に立つ」「保護者へ配布したい」が共に84.6%と高かった。食育のまとめのクイズにほぼ全員の園児が回答し，参加度は良好と評価された。
【結論】結果より，開発した教材は，現地関係者から一定の評価が得られたため，今後同国で利用できることが示唆された。

栄養学雑誌，Vol.80 No.4 246-255（2022）

キーワード： モンゴル国，幼児，う蝕，食育教材，利用可能性